不定期刊行　　第602号　2017.02.07

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩

冬こそ山へ、雪山３連荘･･･岳陽山岳部の様々な楽しみ方

今年は１年の担任をしている関係で、１月26、27日の両日は学年行事でのスキースノーボード教室。学年主任は基本的に本部詰めということで、あまり滑ることはできなかったが、今年初めての足慣らしの２日間。その翌日の28日、３月に山スキーをするために生徒たちの腕前がどのくらいなものか知っておきたいということで、ゲレンデスキーで栂池へ。ボードをやるもの、スキーに興ずるもの、それぞれに楽しんだ。

翌1月29日は､正月に行ったアイスクライミングの雪辱戦で、再び善五郎の滝へ。寒さも本番を迎え、本流の氷もしっかり発達していた。いつもは滝の右側から回り込んでトップロープをかけるのだが、条件もよさそうだったので、今回は、リードで滝を登ることにした。前回も同行してくれた池工時代の教え子のＳに確保をさせ、久しぶりに小生がトップで登った。天気も良かったので、ギャラリーも多く緊張したが、スクリューの利きもばっちりで、快適なクライミングを楽しめた。トップロープをかけた後は､前回は登れなかった本流と脇の小滝の２本を、生徒が入れ替わり立ち代わり登る。厳冬期限定のこのお楽しみに参加した生徒は７名。この日もＳ君、大町高校ＯＢのＯ氏という心強い２名のサポートで、生徒に貴重な体験をさせてやることができた。

ちょっと自慢！
リードする大西
植松晃岳氏提供

「そんなに毎週よくやるね」という女房殿の冷ややかな視線を浴びながら、２月第１週の４日、５日は冬山合宿を黒沢尾根で行う。前日までは後立山は大荒れの天候だったが、４日は朝から見事に晴れ上がった。今回は北高ＯＢのＹ氏のサポート。参加したのは２年３（男子１、女子２）１年７（男子５、女子２）の10名。９時に学校に集合し、鹿島槍スキー場に向かう。リフトを２本乗り継ぎ、11:00ゲレンデトップに集結。予報では、この天気は今日の夕方までということだったので、この日のうちにできることはしようという計画を立てた。ゲレンデトップから最初のピークを越え、さらにその先の広いピークをＢＣ予定地と設定して頑張らせる。わかんとスノーシューの混成部隊のラッセルだが、のっけからの急登ではわかんに軍配があがる。12時５分ＢＣ予定地着。ここは、爺ヶ岳、鹿島槍の最高の展望台だ。13時15分に出発することとし、それまでにＢＣの設営と昼食とした。積雪は少なく、例年の半分程度か。生徒がテントを張っている間に小生はイグルーを作ることにした。初めて見る１年生が興味津々、作り方を観察に来る。これも織り込み済みだ。やや時間を超過したが、13時30分、標高1580mの通称ボトル台地を目指して、サブ行動開始。。まずは、1599mのピークに向かう。天気のいい日にはここは最高のロケーションで、目の前に鹿島槍が惜しげもなくその優雅な姿を見せてくれる。13時50分、その場に立った時の生徒たちの上げる歓声に、こちらも連れてきてよかった

快晴の1599mピーク

と思わず嬉しくなる。誰か強烈な雨男か雨女がいるのだろうか、今年のチームは新チームになってからこんな素晴らしい天候に恵まれたことがなかっただけに、生徒の感動もひとしおの様子（写真参照）である。

せっかくだからもう少し先の「ボトル台地」まで行こうと、生徒の尻をたたいて先に進む。「ボトル台地とは？」怪訝な顔の生徒に、行けばわかるさと先を急がせる。今日は天気もいいので目的地もよく見通せる。地図と現地を照合させながら、三人一組（女子は四人）で行動させる。それぞれのパーティ毎トレースさせながら、ルートどりと雪山ラッセルを体験させる。誰が名付けたか、ボトル台地。その謂いは 400mトラックが取れそうな台地の南西端の木の枝に、ウイスキーのボトルが一本ぶら下げられていることからのネーミング。一体いつからあるのか、微妙に手の届かない高さにぶら下げられているのが、面白い。14:50 そのボトル台地にて、久しぶりに山岳部歌を歌い、下山。

イグルー作り（手前男子、奥女子）

ロープワーク

15:50 にはＢＣに帰着。到着後は、思惑通り、1 年 3 人パーティと女子パーティがイグルーづくりをしたいと言ってきた。そこで、イグルーの作り方を改めて教える。立春で日も長くなったので、5 時を過ぎてもまだ明るい。次第に要領をつかんだ生徒たちのイグルーも、夜陰が迫る 6 時過ぎには、何とか完成した。「テントでもイグルーでも今日は好きなほうに寝ていいぞ」とチームごとに決めさせる。結果、1 年生 3 人のチームはイグルー泊を選択。女子は作ることで満足したのか今日はテント泊を選択。泊まることには躊躇のある 1 年の思惑で決まったらしい。心優しき上級生。

翌日は予報より天気の崩れが遅かったため、2 時間ほどロープワークの講習ができた。10 時過ぎから吹雪になったので、三十六計、逃げるに如かず。すたこらさっさとスキー場を駆け下りた。12 時学校帰着。結構身のある冬山合宿となった。

編集子のひとりごと・・・中信高校山岳部年報 2016/No.40上梓

恒例の年報が完成した。30 号の時にはかなり力を入れて記念号を作り、次は 40 号という思いもあったが、今年は諸事に忙殺される日々の連続でせっかくの周年記念号のチャンスを活かせず、例年並みの年報になってしまったのは残念至極。だが、活動の濃淡こそあれ、例年地区内の山岳関係の活動をしているすべての学校が、自分たちの年報という意識をもって、原稿を寄せてくれることには改めて感謝したい。中信地区の今年の山岳部が、大町と大町北の統合により 1 校減の 7 校になってしまったのは寂しいが、3 年ほど前に同好会として復活ののろしを上げた蟻ケ崎高校山岳部が、三村先生の奮闘で「部」へと昇格したのは、嬉しいことだった。一度廃部の憂き目にあったクラブを再生するのは並大抵のことではない。また、地区内の 7 校の部員数は 112 名と 100 名の大台を超え、活動に活気がでてきたのも特筆すべきことだ。改めて、山岳部を移動できる人材育成の必要性を強く訴えたい。ご入用の方に 1 部 500 円でお分けします。（大西　記）